

群でのみで上昇し、川崎病遠隔期の血管障害バイオマーカーとしての有用性が期待された。

## 5 大動脈瘤ステントグラフトの中期成績

榛沢 和彦・岡本 竹司・名村 理  
竹久保 賢・溝内 直子・林 純一  
新潟大学第二外科

2002年1月から2009年10月に施行したステントグラフト(SG)術90例(76.7±7.8才, 男:女=73:17, 腹部大動脈瘤(AAA)34例, 総腸骨動脈破裂(CIA)2例, 胸部大動脈瘤(TAA)63例, 腕頭動脈破裂1例, 最長留置期間7.5年)を対象とした。

対象例は原則的に高齢者・ハイリスク例とした。SGは自家製SG49例, Excluder(EX)21例, Zenith(ZN)11例, PowerLink(PL)2例, TAG9例, TALENT2例で, 初期成功は97.8%, 1ヶ月未満に緊急4例を含む6例(6.7%)(TAA5例, AAA1例, CIA1例)が死亡, 精神障害1例認め, 1ヶ月以後に大動脈関連死亡無く, TAA術後6ヶ月以内にクモ膜下出血(SAH)と誤嚥性肺炎でそれぞれ1例死亡した。不全対麻痺をTAA術後1例に認め, 3ヶ月以後にTAA術後で出血性胃潰瘍2例, SAH1例, 精神障害1例, 小脳出血1例, 腎不全1例, 癌2例を認め, 1年後にDIC1人認めた。AAAでは1年半後に大動脈瘤感染1例認めた。また術後7日目のCT造影で胸部大動脈ステントグラフト11例に無症候性肺塞栓症を認めた。クモ膜下出血, 小脳出血, DIC, 出血性胃潰瘍例はすべて退院時のDダイマー>10 $\mu$ g/mlであった。術後7日以内のtype1エンドリーク(EL)は腸骨動脈高度屈曲のEX1例, PL1例でそれぞれEX脚を追加した。3ヶ月以後のtype1ELは7例(自家製5, TAG1, ZN1)で5例にコイル閉塞等の追加処置を行った。type2ELはEX7例で認めたが瘤径拡大は無かった。自家製SG1例で3ヶ月後に屈曲狭窄のため腋窩動脈-大腿動脈バイパスを行い, CIA1例で2ヶ月後にEX脚閉塞のため両側大腿動脈バイパスを行った。自家製SGはIFU外や緊急手術で使用したが最長7年半

以上良好で企業製SGが使用できない場合の選択肢となりうると考えられた。

また外来経過観察において最終造影CT時の血中クレアチニン値1.2±0.4mg/ml(0.56-1.81)はSG術前値(0.9±0.3mg/ml)よりも有意に高く(p<0.05), 特に高齢者で顕著であったことから造影剤による腎障害も疑われ高齢者の術後造影CTは最小限度にすべきと考えられた。また慢性期のDIC及び出血合併症は退院時のDダイマー高値例が多く, 嚴重な経過観察が重要で予防にはトラネキサム酸投与が有効であると考えられ, さらに消化管出血も少なくないことからプロトンインヒビターの投与も必要であると考えられた。

## II. 特別講演

### 1 胸部大動脈瘤に対するステントグラフト内挿術

東京医科大学血管外科

心臓血管病低侵襲治療センター 教授

川口 聡

【はじめに】胸部大動脈瘤は, 放置すれば瘤破裂により死に至る可能性もある重篤な疾患として認識されている。治療法は従来より人工血管を用いた置換手術がその中心であるがその侵襲は大きく, 低侵襲化が治療成績を向上させる上で重要である。近年, 大動脈瘤に対する低侵襲治療として血管内手術(ステントグラフト内挿術)が注目されており, 本邦でもその経験数は増加の一途をたどっている。ステントグラフト内挿術は, 血管外科領域での血管拡張病変に対する新しい治療法の一つとしてその発展が期待されている。

【背景】大動脈瘤に対する血管内手術は, 1990年代にアルゼンチンのParodiらが腹部大動脈瘤に対して, 米国のDake, Mitchellらが胸部大動脈瘤に対して臨床経験を他に先んじて報告した。本邦でも1990年代後半から臨床成績の報告が散見され, ステントグラフト内挿術の臨床応用は年々増加する傾向にあり, 2000年に入り臨床治験や中期成績を含んだ報告も認められるようになった。我々も1995年より本治療を開始し, ステントグ